

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市名

兵庫県 姫路市

学校名

兵庫県立姫路東高等学校

人権課題

女性 子供

対象学年・
取り扱った教科等

1年次

時数等

1

目標・人権教育のねらい

・子どもや女性の置かれている現状を知り、すべての人が一個人としてよりよく生きるために必要なことについて考える。

実施した内容

・各クラスごとに、小川真知子さん（NPO法人SEAN代表）による、子どもの人権やセクハラ・パワハラ等に関する講演を聞く。

工夫した点

セクハラ・パワハラ等の内容を考慮し、講師と生徒との距離間に留意した。
生徒は40～70人のグループに分けて、同じ内容の講演を数回に分けて実施してもらった。
講演会終了後には、毎回、質疑応答時間を取り、生徒が個別に講師と質疑応答できるようにした。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

- ・「家庭基礎」「保健Ⅰ」などにおいて、家族のあり方や現在の日本社会が抱える課題を考えたり、「情報Ⅰ」においてメディアにおける表現について知り、そのあり方について意見を交わした。

事業成果

- ・講演会終了後の質疑応答や感想に個人的な疑問を提示する生徒もあり、それぞれ自分事として捉えることができたと感じられた。疑問や感想を講師とやりとりする中で、学校内の配慮以外に支援が必要な生徒に対しては、教員も講師からの適切なアドバイスを受けることができ、その後の生徒支援に役立てることができた。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	兵庫県 姫路市	学校名	兵庫県立姫路東高等学校	
人権課題	女性 子供 外国人	対象学年・ 取り扱った教科等	1・2年次	時数等 2
目標・人権教育のねらい	・ 同年代の若者の経験や価値観の違いを知り、お互いを尊重する姿勢を育む。			
実施した内容	・ 人物写真を見て、その人物の様子や背景からイメージしたことを発表する。 ・ クラスメイトの発表や被写体のインタビューを聞いて、自身との違いを知る。			
工夫した点	・ 臨床心理士の講師を招いて、教員の視点で生徒を誘導することのないように留意した。 ・ 講師と対面でのワークは1クラスだけしかできなかったため、他のクラスの生徒にも同じワークが実施できるよう、学年の教員に対しても講師の意図を事前に説明する時間を設け、丁寧に準備を進めた。 ・ プロの写真家の作品を使ったため、資料写真の提示方法（印刷）、取り扱いに留意した。			

令和 5 年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

- ・「家庭基礎」「保健 I」などにおいて、家族のあり方や現在の日本社会が抱える課題を考えた。

事業成果

- ・臨床心理士による語り口、教員とは違う視点を持つ大人のリードによるワークを行うことで、生徒同士の率直な意見交換につながり、自分がイメージしたことを自由にクラスメイトと交換することでクラス内の親睦が深まった。
- ・写真の被写体のインタビューを聞くことで、他人と自身との価値観や認識方法の違いを実感することができ、自身のアイデンティティーについて考え、さらには自身の将来像（進路）について考えるきっかけにもなった。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	兵庫県 姫路市	学校名	兵庫県立姫路東高等学校	
人権課題	アイヌの人々	対象学年・ 取り扱った教科等	2年次	時数等 2
目標・人権教育のねらい	・ 共生社会実現のために何ができるのか考え、行動する態度の育成			
実施した内容	・ アイヌ民族文化財団のアドバイザーである宇佐照代氏を招聘し、講演会を実施した。地名や動物名に見られるアイヌ語や衣食住の文化の実情、病床の祖母の言葉によって民族への意識を喚起されたとする自身の経験、ウポポイがテーマパークのようにも見えてしまうことへの危惧、遺骨返還問題に対する見解などが語られた他、口琴の一種であるムックリの実演も行われた。			
工夫した点	・ 修学旅行の事後指導として、アイヌの人々の実情を実感できるような講演会にした。 ・ 一方的な講話が続くのではなく、生徒との意見交換を交わしながら、アイヌの文化や講師自身の経験談を話していただいた。 ・ 民族問題をはじめとして様々な人権問題に対して、どのように考えて、どのように行動するか、生徒自身が自分事として捉えられるよう、教員の視点で生徒を誘導することのないように留意した。			

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

- ・日本史の授業において、古代から近世における身分差別やアイヌ等の歴史を学習した。
- ・公共の授業において、国際平和に向けてどのような姿勢で何をすべきか、多面的・多角的に考察し、議論した。

事業成果

〈2年次生徒へのアンケート調査より〉

知識的側面：「アイヌ民族の文化・伝統を知っている」

そう思う、ややそう思うと答えた生徒 事業開始時：47.9%→事業終了間際：73.6%

価値・態度的側面：「地域や社会をよりよくするために何をすべきかを考えたことがある」

そう思う、ややそう思うと答えた生徒 事業開始時：59.8%→事業終了間際：67.0%

技能的側面：「自分と異なる価値観をもつ人々と関わることができる」

そう思う、ややそう思うと答えた生徒 事業開始時：86.2%→事業終了間際：87.1%

【生徒の変容の分析】

- ・知識的側面について、事業開始時には、「まだまだアイヌ文化については理解が進んでいない」などの意見が見られたが、人権LHRやアイヌ民族博物館訪問、講演会を通して「アイヌ民族の文化や歴史を通して、民族問題や共生社会の実現について考える良い機会となった」、「ひとりひとりができることをするためにまずは知ることが大事と感じる」という意見へと変化が見られた。
- ・技能的側面について、事業開始時からすでに、「自分とは異なる様々な考え、容姿を持った人が数え切れないほどいることを常に理解しておくべきだと思う。」という意見があり、他者を受け入れる気持ちを持ち、行動に移している生徒多かった。事業後はそのような生徒がさらに増え、事業による取り組みの成果が見られる。